

---

# キミは.....

遼

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミは……

### 【著者名】

IZUMI

N7639B

### 【あらすじ】

エイプリルフールだから嘘をついて ギャーーー！

遼

「ボク、嘘は嫌いなんだあ……」

キミは……

キミと知り合ったのは、つい最近のことだったと思つ。高校に上がつて不安だつた僕に、キミは明るく笑いかけてくれた。本当に嬉しかつた。

キミは、僕が高校に上がってからの最初の友達になつた。何でも話せて、何でもできて、何をするにも一緒になる、性別なんて関係ないくらいの親友になつたと思つてゐる。キミが僕のことをどう思つてるかなんて、僕にはわからないのだけれど。

キミはとても目立つ。太陽の光を存分に吸い込んだ、柔らかそうな茶色の髪。少し眠そうに見えるけど、それがかえつて柔軟な人となりを思わせるし、いつも微笑むように歪んだ唇なんて、僕は見てるだけで吸い付きたくなつてくるんだ。眉目秀麗、それに才色兼備。

キミは「完璧」という言葉が正に相応しい女の子だった。

それに比べて……僕は、何をしてもドジばかりの、キミとは別の意味で目立つてしまふ男。ブサイクというわけではないけど、男とは思えない中性的な顔つき。勉強ばかりで運動はからつきだから、男友達なんて数えるほどしかできなかつた。

僕らの間には、壁が多すぎた。そして何より、僕はキミが羨ましかつたんだ。

出来心、かな。キミを少しどいてから困らせたかつた。そんな困つたキミを見て、僕は一度でいいからキミより上に立つてみたかつた。

「めんね。こんなにもキミを困らせるつもつは、なかつたんだ。

「いくま君、おはよー」

「ああ、うん。おはよー」

学校はとつぐに休みに入つてゐるのに、この人は「学校で会おう」つて聞かなかつた。僕は部活にも入つてないし、そうアクティブに学校に通つてたわけじゃない。それなのに「勉強がしたいから」なんて言い訳が通用して教室を開けてくれる理由は、僕じゃなくて間違いくなくこの人だ。ずるい、なんて思つた。

「今日もいい天氣だね。すっかり春めいてきちゃつた」

「最近は、上着を着ると暑いくらいだよね。桜も段々咲いてきたし」「近くの公園、もうすぐ満開だよ。いくま君は、ボクと一緒に見に行くんだからね？」

少し強引な誘い文句に、思わず笑つてしまつた。

「うん、わかつてゐる。さおりちゃんの誘いなら、僕も光栄だよ」「ふふ。そうだよね、断つたら許さないんだから」

この人は、こんなことを割と本氣で言つてゐるから怖いんだよね。もちろん許さないといつても何をされるわけでもないけど、以前誘いを断つたら一日中恨みがましい目で睨まれたことがある。顔立ち

が整ってる分、ただ睨まれるだけで十分な威嚇になってしまふ。

さおりちゃんはきっと、何に対しても本気なんだろ。やうやつて姿勢を傾けすぎるから、時折方向性を見失うんだと思つ。

「温かいな。制服、脱いでいい？」

「じよ、冗談やめてよ。下に何か着てるの？」

「シャツ一枚だよ。こくま君なら、見ていいの」

「……黙れだよ、黙れ！」

少し狼狽したのがわかつたらしく、さおりちゃんは「可愛い」なんて笑つた。この人の女性たる部位は大きいから、シャツ一枚なんかになつたらと思うと黙つてられない、主に僕の息子が。だって制服着ても、圧倒的な存在感、自己主張するその双丘。

言葉だけで十分だ。僕は照れてしまつて、彼女を見ないように俯いた。そんな僕を、さおりちゃんは可笑しそうに笑う。

沈黙を包み込むのは、穏やかな陽光。窓がカタカタと鳴つてゐるから、開けたらきっと優しい風が吹き抜けて、僕らの距離を埋め尽くしてくれるだろ。暖色の空気、それが正しい。

「宿題、終わつた？」

不意に出た声は、ちゃんとさおりちゃんに伝わつたようだ。

「まだ。ボク、これがないと君と会つ口実がなくなつちやう

「そんな」

僕は宿題なんてなくとも、

「呼んでもれれば、会つに行くよ。宿題とか関係ないじゃないか」

「そう? 嬉しい。じゃあ、今度電話するから、番号教えておいて

?」

そういうえば、これだけ一緒にいたのに携帯の番号を教えてなかつた。自分の迂闊さを呪い、急いで開いた携帯をさおりちゃんに渡した。プロフィールを開いておいたから、番号はすぐに見れるはずだ。眉を顰めながら携帯を操作するさおりちゃんは、目が悪い。元々色素が薄いらしく、光による刺激が強くなるとモノが見えにくくな

るって聞いたことがある。

「はい、ありがと。可愛い番号だね」

「番号に可愛いも何もないじゃないか。適当なこと言わないでよ」

「あはは。だって、いくま君のことなら何でも褒めてあげたいって思つから」

「無理して褒められても嬉しくないでしょ?」

「ボクはいくま君になら、なんでも褒めてもらいたいよ」

返してもらった携帯を閉じながら困ったように笑つてみると、さおりちゃんはやつぱり微笑んだ。僕は、この笑顔が崩れたのをほとんど見たことがない。だって彼女の機嫌を損ねるものなんて知らないし、譲れないものを知つてゐるわけでもない。僕は意外に、さおりちゃんを知らないんだ。

知つてることといえば、一人称がボクつてこと、美人で何でもできるつてこと、優しいこと、明るいこと、それから僕のことが、好きだつてこと。

自惚れではないと思う。時折感じる熱っぽい視線は、間違いなく彼女のものだろう。それに気付かないとしたら相当鈍いつていえるほど露骨で、そして純粹で、原始的な、優しい好意だ。向かはれて心地いいけど、しかし僕は未だにそれを受け入れていない。

今の関係が壊れるのが怖かった。僕らは親友、それだけでよかつた。

「勉強、する?」

「いくま君、本気で言つてるの?」

「いいや……じゃあ、遊ぼうか」

僕らだけの遊び。

さおりちゃんを膝に乗せて椅子に座り、ずっと撫でていてあげるだけ。彼女はそれだけで、甚く喜んだ。蕩けるような笑みが、背中からでも窺えた。

さおりちゃん以外で、僕の唯一の女友達、えりちゃん。人柄から、

さおりちゃんとは違うべくトルで男に人気がある。黒い髪に黒い瞳、「綺麗」というよりは「美しい」といった方が正しい。怜俐な印象を受ける彼女は、正しくそのまま聰明な女性で、そして常に冷静な人だ。

二人共とても優しくて、僕の方からも離れることなんてできそうになかった。

「いくません？ 手が止まつてましてよ？」

「ああ、えりちゃん。ちょっとね、明日のこと考へてた」

「明日……ああ、何かご予定が？」

丁寧な口調は、その生まれによるものだ。真正のお嬢様、といえばわかつてくれるだらうか。

「予定というか、僕も誰かを騙してみたいなー、って」

「あら、意地の悪い方ですわね」

「そんなこと言わないでよ。僕、いつも騙されてばかりだから」「悔しいんですね。本当に、可愛い人」

くすくすと笑うえりちゃんは、さおりちゃんに似たようなことを僕に言う。女の子が僕を褒める時は、いつだってそれ、「可愛い」だ。たまには違う褒め言葉が欲しいけど、仕方ないといつ諦めもあつた。

「わたくしもお手伝いいたしましょうか？」

「そうしてくれると助かる。そうだなあ……」

口元に手をやって、たおやかに笑むえりちゃんが目の前にいた。

「えりちゃんのこと、好きだよ」

「知つてますわ。いくません、それでは嘘にはなりませんよ？」

「……やつぱり駄目か。エイプリルフールにこうこうこと女の子に言つの、定番じやない」

「そうですね。ですがそういう時つて大抵、嘘じやなくて本当に好きになつてるものですわよ」

そういうえば、なんか納得しながら俯いていると、いつもの穏やかな笑い声が聞こえてくる。耳に優しいこの声を、僕は教室で

聞いたことがない。正確に言うと、えりちゃんが僕以外に笑いかけたことを、僕は見たことがないんだ。

この人も、僕を好いてくれていた。持て余すほど大きな好意を、僕にくれる。

この二人は、正直にいうと僕の手には余る。だつて二人はクラスの中でのアイドルのような女の子で、皆に慕われてる。嫉妬されて男に睨まれることもある。

「えりちゃん、騙してみたいなあ」

「簡単ですわ。あなたが一言「愛してる」と言つてくだされば、わたくしの目は見えなくなります」

「……難しい注文だ」

「いけず」

それでも笑つてゐから、この人には敵いそうにない。

昔からずつとそつだ。この人は僕に隙なんて見せてくれたことはないし、代わりに僕の隙を見逃したこともなかつた。幼馴染という関係にあつて、僕らは至極不揃いな影を持つてゐる。

「昔からそつですわね。可愛い顔で、色んな人を虜にする」

「僕についてくれるのは、えりちゃんだけじゃないか」

「誤魔化そうとしないでくださいな。知つてますわよ、確か……さおりさん、でしたか？」

「ああ、うん……知つてたんだ」

少し意外だ。えりちゃんは、物事や人物に深い関心を寄せたことがないから、てつくりクラスメイトの顔と名前すら一致してないと思つてた。彼女、そうやつて何人もの男を失意のどん底に陥れてきたという経歴がある。酷いものだ、好きと告白してきたクラスメイトに「どちら様?」なんて言葉を悪びれない笑顔で浴びせ掛ける。本当に興味がないんだ。彼女の視界も、また狭い。

「ふふ、妬いてしまいますわ……いくまさんは、わたくしのモノですのに」

「冗談。僕にえりちゃんは勿体無いよ」

「勿体無い……？」そちらこそ冗談はお止しなさいな。何度も申した  
らわかるの？ あなたは素敵なお人。わたくしが慕うんですから、  
間違いありません」

「慕うつて……本気？」

「冗談めかしたように言つことは何度もあった。というより、今だ  
つて冗談だと思つたかった。でも、思い返してみても今ここで聞い  
ても、冗談には到底聞こえない。

「これ、告白？ エイプリルフールは、明日だよ？  
「知つてゐるくせに、意地の悪い人。証明、してみせましょうか？」  
「証明つて、どうするつもり？」

小さなテーブルを回り込んで、えりちゃんは僕にしなだれかかつ  
てきた。思わず見回した広い部屋は、彼女の住むマンションの一室  
だ。一人暮らしをするえりちゃんの家に、僕は毎日決まって遊びに  
来ていた。

「あなたがわたくしの部屋にいらっしゃるたび、残り香で自分を慰  
めてきました」

「それ、つて」

「知りません？ オナニーです」

卑猥な単語がこんなお嬢様、しかも幼馴染の女の子から飛び出し  
てきたことに、思わず眩暈を覚えた。窓から差し込む夕陽が、妙に  
目に痛い。

「愛しくて愛しくて、慰めても慰めても足りませんの。声を聞いて、  
わたくしを見て、触れて、わたくしを導いてください……何度も焦が  
れたことか」

「待、つて……」

首に腕を回してきたえりちゃんを止める術を、僕は持たない。抵  
抗は意味を成さず、僕はそのまま床に倒れこんでしまつた。上から

覆いかぶさるえりちゃんに、初めての恐怖が襲つた。

首筋に落とされたえりちゃんの唇は、温かく湿つていて、柔らかくて、色情に染まつた吐息が僕を刺激した。止まらない。

「ここで果てたら、どれだけ気持ち良いのでしょうか。わたくし、我慢を続けるにも飽きました」

えりちゃんは慣れてるのかも知れないけど、僕は「ここに」とをするのは初めてなんだ。

そんな考えを見透かすように、えりちゃんは僕の耳に笑つた。  
「わたくしも初めてですわよ？ いくません以外の男性に、操を捧げるつもりはありませんの」

「でも、まだ」

「愛します。あなたも、わたくしを愛していくださつてる  
「どうして、どう……どうしたの？」

「……」

僕が言い募つていると、不意に重圧が消えた。

僕の身体から離れたえりちゃんが、笑いながらため息をついていた。まだ、その色は変わらない。

「今日はここでいいですわ。これだけ香りが残れば、今日は果てられるはず……」

「果てるつて……えりちゃん、えっちだよ」

「わたくしは変わりませんわ。あなたを愛して、あなたを想つて自分を慰めて……でも、まだ果てたことがありませんの」

そんなことを白状されても、心底困る。

ピンク色の壁紙が、彼女の色彩。色に染まつた彼女の吐息が、僕の息と混じつて消えた。テーブルの上のクッキーを指先で摘まんで、えりちゃんは吐息と同じ色の唇に咥える。

不意に笑つたえりちゃんは、僕に言った。

「だったら、こういふのは如何でしょう？」

「どうしたの？ いきなり呼んで」

「さおりちゃんに、話したいことがあって」

駅前の噴水で、僕らは待ち合わせをした。待ち合わせ時間である午前十時、僕は待っていたさおりちゃんにゆっくりと話しかけた。

桃色のハイウエストワンピを着たさおりちゃんに、少しだけドキドキしている。可愛いな、という感情以外に、少しだけの後ろめたさがあったからだ。でも一度やると決めたことだし、不安よりも期待が大きかった。

「少し歩こうか」

「こうして一人で歩くの、いつ以来かな？」

「もう覚えてないくらい昔だよね。さおりちゃん、なかなかプライベートで会おうとしないから」

「……だって、怖いんだもん」

その後呟いた言葉は、僕には聞こえなかつた。

「手、繋いでいい？」

「うん。あんまり立つことはしないでね」

「ありがと、いくま君」

柔らかい手、温かい手。温かくなってきた春の空氣に溶け込むようその手は、不思議と不快感はなかつた。

いつも通りに微笑んでいるさおりちゃんは、いつもより少しだけ自分に氣を遣つてみるみたいだ。いつも適当に流しているだけの髪を結い、アップにしていて、くらくらするほど綺麗だ。髪にコンプレックスがあつたらしく、少しだけ髪を誇るようなことは今までしてこなかつたのだ。

「デートって呼べるほどのことでもなし、気合を入れるようなものでもないのに。」

僕は、酷く冷めた頭で熱くさおりちゃんを見詰めていた。その視線に照れたように笑つたさおりちゃんが、不覚にも愛しかつた。

楽しい時間を過ごした。デパートや喫茶店、それからブティックなんかも寄つて、色々なものを買った。さおりちゃんは始終楽しそ

うな笑顔を僕にくれた。

事実楽しかったんだから。僕が、さおりちゃんが一番樂しくなる  
ように仕向けたんだから。

そして最後の仕上げに、僕は口にした。

「これは、最後の晩餐なんだ」

「……え？ ど、どう、ことかな？」

呆然とした顔をしてこちらへ、さおりちゃんが僕の話を察して  
いるはずだ。

「わかんないもん。ボク、知らない」

「さおりちゃん、もう僕らは一緒にいない方がいいよ  
「どうして？ どうしてそういう意地悪を言つの？」

表情を変えて、今度のさおりちゃんはもう泣きそうな顔をして  
いた。僕だって罪悪感はあつたけど、今まで散々からかつてきた復讐  
をするくらい、許されるはずだ。

エイプリルフールにちょっとした嘘をついて、さおりちゃんを見  
返してやりたい。それだけの為に、今日のトークを企画した。企画、  
原案はえりちゃん。テーマ「ースは、なるべく樂しくなるよつて僕  
が設定した。

「なんで？ ボク、悪いことしたかな？」

「そういうことじやなくて」

「」のフアミレスで待ち合わせしたから、そろそろ来てくれるはず  
だ。

「お待たせしました、いくません」

「ああ、えりちゃん」

「え？」

今度こそさおりちゃんは自分を手放した。色を失くした田で、僕  
とえりちゃんを交互に見遣つている。えりちゃんの笑顔に、罪悪感  
なんてものは感じられない。

最初から乗り気だったのだが、このえりといつ女の方は、何事にも

素直で真っ直ぐな彼女は、言葉を選ばず「口にする」とが多かった。

「さおりさん、でしたよね？　わたくし、いくまさんの恋人の」

「いじ、びと？　えりさんが？」

「ええ、えりと申します。以後お見知りおきを」

「嘘」

「嘘じやありませんわ。ねえ、いくまさん？」

「……ああ、嘘じやないよ」

「嘘」

次第に強くなつていく語氣で、僕の脳裏が告げる。「わいせつ」

と。

まだ騙せたわけじやない。途中でやめたら、何も面白くなじやないか。後でネタバレすればいいだけの話、簡単なものだ。

「だから、さおりちゃん」

「さおりさん」

「いや、いや」

「もう、彼とは会わないでくださいな」

「あなたには関係ない！　いくま君が」

「何も、動搖すら見せず、えりちゃんは口を重ねる。

「もう何度も身体を重ねました。さおりさんはあります？」

「うそ、うそだっ」

僕の感覚は、エイプリルフールの魔力にやられて麻痺しているのだろうか。追い詰められ取り乱していくおつりちゃんを見ても、何も思わなかつた。いや

面白い、とさえ。

「セックス、気持ちいいですかよ？　あなたも男を探してしまらないなさいな。いつまでもいくまさんに付き纏われると、迷惑ですのよ」

「いくま君は、ボクと会いたいもん。ボクのこと、好きでいてくれるもん」

「そうでしたの？　いくまさん」

だからかな。平氣で声に出せた。

「いいや、もう会わない方がいいよ。好きでもない子とは、一緒にいない方がいいからさ」「ひー

翌朝の日覚めは早かつた。日覚ましもなく起きた僕は、逸る氣持ちを抑えながら私服に着替えた。今田は学校でえりちゃんと待ち合わせてる。

鞄にテキストやノートを詰めて家を出た僕は、自分でどんな顔をしているかわからなかつた。たぶん、酷い顔をしてるんだろうけど。エイプリルフールを過ぎると、途端に罪悪感が襲つてきたんだ。本気で泣いてたさおりちゃんに、早く本当のことを話してあげて、僕はキミが好きだよって言ひてあげなくひや、さおりちゃん以上に僕が駄目になりそだつた。

だから僕は、早朝の通学路を息切れさせて走つた。走つて十分、えりちゃんは先に来ているだらうか。

桜が見頃を迎えた校門から校舎を一つぐるりと回つて、体育館に辿り着く。その裏で、僕とえりちゃんは待ち合わせをしていた。一人の客人、さおりちゃんを招いて。昨日のファミレスで、鞄に手紙を忍ばせておいた。ここへ来るようになると、えりちゃんの字で。

そこで僕らは、さおりちゃんを思い切り笑つてあげよつ。「騙された」って、少しだけ馬鹿にしたようにね。

体育館の前に辿り着いた僕は、息を整え――

「ああああああああああああつ――！」

走り出した。尋常じやないその叫び声は、間違いなく……

「さおりちゃんつ――！」

「ひの、泥棒猫おつ――！」

僕を待つていたえりちゃんに向けて、それを突き出すのは、狂氣の表情を作る、さおりちゃんだった。

「ボクのモノだったのに、もう少しじだったのにっ！」

「あら、心外ですわ。いまさんは、昔からわたくしの隣にいてくださいましたもの」

「知らない！ いくま君は、ボクが、ボクの……ああ……ずっと見てたのに！ ずっとずっと、いくま君だけを見てたのにっ！」

怖い、と思つた。狂気に染まるおりちゃんも、全く動じた様子のないえりちゃんも、僕の心も身体も、心底震え上がらせた。

何だ、何が起こってる？ 僕はさおりちゃんに嘘をついて、でもエイプリルフールだから許されると思つてて、今日はそれを実際に許してもらつにきたんだ。それだけ。それだけのはずなのに どうしてさおりちゃんは、“血のついた”包丁を持つてるんだ？

どうして、えりちゃんは壁際に追い詰められて倒れてるんだ？

「あなたがいなければよかつたんだね。ボク馬鹿だから、こんな簡単な答えを出すのに一晩も考えちゃつた」

「わたくしはいくまさんのモノ。もう捧げるものは全て捧げましたわ

「だから？ そんなの、あなたがいなくなれば関係ない」

「おわかりになりません？ あなたが入り込む余地など、とつてありませんの」

「 黙れえ！」

僕はやつと正気に戻つた。さおりちゃんの包丁の刃が、避けよう

としたえりちゃんの肩口に刺さつてからだ。

「えりちゃんー！」

「ああ、ほり、わたくしの名前を呼んでくれた」

どうして、どうして、エイプリルフールはもう終わつたのに。嘘をつく必要は、もうなくなつたのに。

「こくま君、待つててね？ 今、この女殺すから

「おりちゃん、じめん、じめんね。昨日はエイプリルフールだから、それで」

必死で弁解する僕を笑い、一度だけえりちゃんを見たさおりちゃん

んは、そのままの こつもの微笑みを湛えて、僕を窘めるように口を開いた。鮮血のような、赤だ。

「ボク、嘘は嫌いなんだあ……」

知らなかつた？ 笑うえりちゃんは、そのまま包丁を振り上げた。しかし網膜の色素が薄いとおりちゃんの目に強い陽光が入り、包丁は手から抜け、勢いよく飛んで行つた。

そしてその包丁の先に

「愛してますわ、いくません」

「ほり、あーん」

「どうしたの、食べないの？」

「もう、我が儘なんだから」

「はい、新しい箸だよ」

「あんまり手をかけさせちゃ駄目だよ」

「いくら手がないからって」

「ボクの苦労もわかつてね」

「こんなに好きなんだから」

「ああ、あの女？」

「知らない。もう会つてないから」

「いま君は、ボクだけ見ててくれればいいの」

「ボクはずつといくま君だけ見ててるよ

「ね、好き？」

「よかつた。ボクもずっと好きだよ」

「ところでわ」

「 今日のお肉、美味しいかな？」

終わり

(後書き)

変遷の歴史を記すことは、必ずしも後書きである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7639b/>

---

キミは.....

2010年10月8日15時56分発行